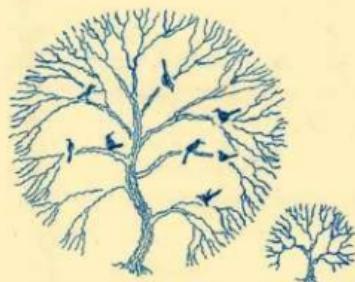


熊本県玉名市繁根木

伝左山古墳



昭和 45 年 12 月



玉名市文化財
保護委員会

会長 田添夏喜

熊本県玉名市繁根木

伝左山古墳

目 次

1 所在地	1
2 墓形	1
3 奉見の端緒	1
4 内部構造	1
(1) 横穴式石室	1
(2) 石棺について	2
5 割葬品について	2
(1) 第一期 奉見割葬品	2
(2) 第二期 奉見割葬品	3
○ 直刀身	3
○ 槍身	4
○ 短甲	4
○ 青形の鉄製品	4
○ 空	4
○ 頸鍔	4
(3) 第三期 奉見割葬品	6
A 装身具	6
イ 金製垂飾り付耳飾り	6
ロ 金製鏡	7
ハ 玉類	7
○ 勾玉	7
○ 管玉	7
○ 小玉	8
B 武具類	8
C 馬具類	8
6 まとめ	8

1. 所
王名
にあり
伝左山
た。

2. 墓
しせ
高さ兩
坦に均
呈して
現在よ

3. 奉見
安政
の後方
事中少
奉見し
焼き、
面に文

4. 内部
この
上層の

(1) 横
二
と
石室
西川
「玄
周空
の形
死は
僧五
り且
左近
官
一つ
前

王名市繁根木 伝左山古墳

1 所在地 王名市文化財保護委員会長 田添東喜

王名市繁根木、王名市役所の西約60メートルの、国道208号線に沿う高台上にあり、古見当初繁根木の古墳の名称で紹介されたが、この丘陵が小山を形づくり伝左山と呼ぶ。昭和40年以来この山の名を用いて「伝左山古墳」というようにした。

2 墓形

しぜんに形成された小丘上に營なまればらしく、下底の直徑およそ35メートル、高さ南側で約1メートルの円墳にして、二段築成の痕跡が認められる。墳丘上は平坦に均らされ、明治18年来一石祠をまつる。祠は北及び東南部が着るしく変貌を呈して円墳の常規を乱しているが、上部はおおむね原型を保つている。安政当時は現在よりはさかに拡張された墳内敷地をもつていたことが推測される。：

3 奉見の結果

安政4年頃、繁根木八幡宮西方の党的倉庫建設に際し、毒蟲寺（現県立美術館付近）の後方丘陵地の山上を削してこれに充てうため連日数百の人夫により搬出させ、工事中中山の中腹に偶然一窟が開口した。翌日内部を探査し、多くの副葬品や石室を発見した。高貴なる人の墳墓であるとおそれを感じ、副葬品ももとにかえし、石室を開き、「古墳」の二字を刻銘して立てその口を封じたという。今なお残つている石面に文化五年銘の見ゆる角石がそれであることに間違はない。

4 内部構造

この古墳内部構成に二様式があるとされ、一つは板石小口積み横穴複室と、その上層の封土中央に家型系の石棺を封するといふ様式の珍らしい古墳である。

(1) 穴式石室

二段築成とみらるる封土の下底に築かれている。奥室の南側壁の天井に接するところに1人が出入できる程度の破壊口が開く。これが安政年間の破壊口である。石室はおおむね封土の南寄りの下底にあたり、複室の主軸を東西にとり、前室を西に奥室を東にして構かれている。

「玄室（奥室）では、安山岩の薄い板石を小口を美しく室内に向けて積み上げて周壁とし、東面を2、40メートル、南北を1、80メートルの大きさの階九角型の形式につくり、これに接して6個の薄手のない板石を床面の四方に高く組んで死床室とし、また東、南、北の三面のぞれぞれ中央よりやや下のあたりに角石一個をそれぞれ短かく突起させ、石棺のあつた名残りを止めている。このあたりより四隅を丸くし、1、80メートルの高さのところで丸型に組み、広い板石二枚を別ぎ合わせて低い天井部をつくつてある。

割石の小口の大きさや並べかたがよく拘り井然とした構造はこの古墳の特徴の一つといえよう。また内面根なく厚て朱が塗られており。

前室では、高さ0、8メートル、長さ1、70メートルに、奥室南北辺とはば

幸見された
に設置され
たが、この
し2回に亘
のであるか
い。其の実
を残し、2

(2) 第二群室
明治17
ニ石棺アリ
り当て、棺
棺外で棺槨
所有者塚本
を刻銘した
なお、石
舟之られ、
推測され
この二群
って今はな
當時、燈半
個、鉛棺身
記録によれ
、2センチ
1、3センチ
赤にしづ材
個もこれに
9センチ
されが主
類例がなく
天草郡千葉
位置より產
の見出と、
である。

同じ長さに幅をとつて残さ、南北壁と東面北半を板石小口積みにして、南北を三側の大石で覆い天井部をつくろ構造となつてゐる。

前室と奥室との境界となつて築壁の間に寄せ、幅40センチ、高さ80センチの空間をとり、西側に大石二個を立て、その上に長さ1.20メートル、径22センチほどある長い大石をのせて第二羨門をつくら。

第一羨門部は大部分が崩壊してゐて、その形状を明確に知ることは困難のようであるが、傾いた革たたみ大石と、多少痕跡ではあるが羨門石と見られる大石やその他の石の存留状態で幸うじて原形を想定し得る。第二羨門部より西へ1.90メートルのところに径20センチ内外くらいの石塊を幅1.20メートル、高さ0.8メートルほど積み上げ、粘土やま土などとつめてかため、第一羨門部を封密した状態は原形のまま残つてゐる。羨門石組みが第二羨門に比し極めて貧弱であるため、圧力に堪えきれず崩壊したものであると思われる。

まだ幸見当初、奥室の北と東の全面に幅90センチ、高さ40センチほどの、支柱で支えられた石樋の施設があつたことが伝わられてゐるが、経年についてのことはわかつてゐない。

(2) 石棺について

横立上中央にまつろ石棺の連下で、横穴式石室奥室の上層にあたる封土中に埋葬され、凝灰岩2個をくり抜いて棺身と棺蓋とをつくり、その長さおよそ2メートル、幅88センチ、高さ50センチの大きさといふのであるから可なりの大きさである。山下古墳後円部の石棺にくらべると長さが30センチ短く、横幅が8センチほど長くなり、形式も異なるようであり、小路古墳石棺と類似する点多いようと思われる。

棺身の両端に縦かけ突起の穴があとがあり、棺蓋は棺身にくらべて割に大きくてその高さを50センチにし、印籠蓋のように互いに相接合する形式になるといふ。

石室を設けず、直掩封土中に收められてゐることなどすべてが幸見古墳本師認定校勘であつた福原佐助氏の調査報告によつて知ることができる。

5 創葬品について

左山古墳出土の創葬品については、幸見の時類の土か三期に分られる。即ち、安政4年壁工採取の土木工事で古墳とともに始めて幸見されたもの左第一期とし、明治17・8年頃福原佐助氏の調査の際に幸見されたもの左第二期とし、昭和40年、内部清掃と実測調査で幸見されたもの左第三期とする。

(1) 第一期幸見の創葬品

安政4年、倉庫建設にあたる壁工採取の土木工事にかかつて偶然

○直刀身 明
口のうちの
ンチの大き
素振で、頭
の破片をつ
頭の部分が

発見された古墳の内部を探検して、多くの副葬品が確認された。奥室の東と北壁に嵌入された石碑の上に、鎌1、兜3、環頭大刀一枚口、鉄鏡一枚が安置されていたが、この際には崇りを恐れてそのままにし破壊口を封じたが、その後盗賊が侵入し2回に亘つてこれらを持ち去り、そのあと村童等が自由に入出していたというのであるから副葬品はいうに及ばず、内部施設に至るまで盗難、破壊は免かれない。其の実、福原氏が最初に内部実査を行つたときは、石碑はわずかにその一部を残し、2・3点の鉄片を認めただけであつたという。

(2) 第二回発見副葬品

明治17・8年頃 福原忠郎氏が肥後国誌の「木崎ヲ紀産村ノ墓トナシ、地中ニ石棺アリ」とある記事の事実を確認するため弁橋を行つた結果、一石棺を掘り当て、棺内に環頭大刀二口を含む刀剣五口、貝輪三個、不明の鉄器、鉄片等が棺外で棺頭三口がそれぞれ出土した。棺は調查終了後再び埋めて旧に復し、土地所有者藤本平八氏によりその上廻に石碑が建立されたところ。明治18年の年代を割当した現存の石碑がそれである。

なお、石棺の所在については、それ以前に発見されたことは肥後国誌の記述で考えられ、棺内の副葬品の中にはすでにその折に散逸したもののがかなりにあると推測される。

この二類にわたつて発見された副葬品の多くは今日に伝えられた。戦災にかかつて手ではない白川町にあつた旧熊本県庁前県政会明麗館に保管されていただが、當時、短甲一領、環頭大刀二口、船当、若しくは鍔手と思われる鉄製品の丸欠二個、鉄袖舟二口、貝輪二個があつたという。石棺内より出土した貝輪は発掘者の記録によれば三個となつてゐるが、この当時は二個になつておらず、一つは長径4・2センチ、短径1・0、3センチの大きさで、他はこれよりやや小さく、長径1・1、3・5センチ、短径1・1、9センチ、ともに幅広く、中央の孔が側面に小さく赤にしづめ材料にして作られたものである。福原氏の記録によれば散逸した貝輪一個もこれらと同一形式になる、半分欠陥し、長径1・0センチ、中央孔の長径も、9・5センチの大きさであつたという。この種の貝輪は石器時代遺跡より多く発見されが主体人骨の腕に使用されたものであつる。亦古墳出土としてはあまり類例がなく珍らしい。鉄の類では金屬が石製が通例である。肥後で日奈久古墳、天草郡千歳島古墳の出土品と共に稀にみる遺物として、佐左山石棺貝輪が出土の位置より舟形で腕輪として使用されたものと思われ、これが前記のように歴史以前の貝輪と、後の車輪石、石劍、銅訓等との系統上の連携を示す点で興味あるものである。

○直刀身 明麗館陳列のところまで三口を存し、内二口は環頭大刀で、石棺内発見五口のうちの三口と思われる。大きさはうは總長7・0、3センチ、及幅2・38センチの大きさで、柄頭は同じ鉄で作り茎の先につけられ、長径4・4センチ大の素縫で、菊水町舟山古墳出土大刀とよく似ている。小さいほうもまた同型で、舟の破片をつなぎ合わすれば同じ長さとなる。三口目のは、茎の部分を失ない、柄頭の部分が不明であるが、現長1・8、1センチ、普通型の直刀である。福原氏の

通常封土の上
壁で、がそつ
るであろう。
招葬にはせん
室が封土の發
せて、両者の
そろ上にもま
まさに吾人の

報告書では総長3尺7寸8分の長さのものもあつたことも見えざが財在不明となつて
いる。

○槍身 奈見当初三口あつたのが明麗館のころあつたの二口分で、うち一口はひどく被
錆し形もわからない。見得ろは一口だけである。総長20.3センチ、槍袋の径3
センチ、袋部と斧との間にくぎりも認められず、前面菱形左なし。古墳出土の槍身
として最も多い例である。

○短甲 一領あり、石室内出土の遺品として最も注目左ひくものとし、大型鎧製品の
原型をよくとどめている。笛木町舟山古墳の甲とともに県下出土短甲の双璧とされ
た。高4.7-4センチ、革での鉄板を革にあわせ合せて鎧とし、周囲に複輪左
旋す形式で、右側へ開閉し正面の胸で合わせる構造となる。その模式的なもので
あるといえよう。端上の革紐や部分金具などは失われてゐる。

○異形の鎧製品 外換し原型を知ることは困難とされ二箇分はあるものと考えられる。
下林繁夫氏(済々家故論)はこれを簪子と見たが、その輪部が朝鮮大郎の一古墳出
の遺物、及び筑波日の岡古墳奈見のものに似てゐることから推せば福原氏の腰当と
いう見解が妥当だと思う。何れにしあ珍らしい遺物である。

以上述べたほかに佐左山古墳出土品として形状左止めでいゝものに充二個と、
鎧一箇がある。

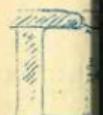
○兜 二個ともに高底付書の類で、その一つは札が小さく、これを巧みに矧ぎ合わせ
上部に多鉢形の飾りがあり、形が上総清川井和泉大仙陵、埴後月の研葬の古墳出土
の金綱裏り兜と共通する点が多い。大きさは鉢の長径23.3センチ、短径18.8
センチの大きさとなつてゐる。

他の一つは前巻に比し粗製で、小札がわずかに大きく、上部の横内形が扁平にな
り飾りがない。

○頭廻 背部に欠損の状態が認められるが、ほぼ原型を残し、各部に丸ゆる穿孔によ
り両面より胸の上部を覆う着装の状態を察知することができる。

以上述べたとこを総括すると当古墳の示す遺品は武具において幾種である。この
武具のみがこの古墳出来の副葬品のすべてであらかじめ、なお研究の余地がある。す
ぐに述べた遺物の上から石室内に葬られた被葬者は男性であつたと推測が確られ、またこれらの其貝類が江田舟山古墳、埴後月の岡古墳、和泉大仙陵等種々の点より年代
を勘證し得る遺跡の出土品と同一様式であることは、ひいて本墳自体の直営年時の推
測も加えさせるものとして重要視されるものである。

この直営年代と関連して一考を要することは、さきに述べた二箇の構造部分の何れ
が果して本墳の主体として營なされたものであらかじめ問題である。この場合陪葬
の簡易に標準を區くとすれば石棺のほうか後のものと考えるのが妥当だと思うが、兩
者の封土に対する位置関係に基づいて、これ在日中の古式古墳に於ける主体の位置の



不明となつて
口はひどく破
被袋の徑3
出土の槍身

軍事製品の
双壁とされ
西に複輪走
的なもので

考せられる。
の一古墳出
氏の腰当と

二個と、義

向き合せ
の古墳出土
は18.8

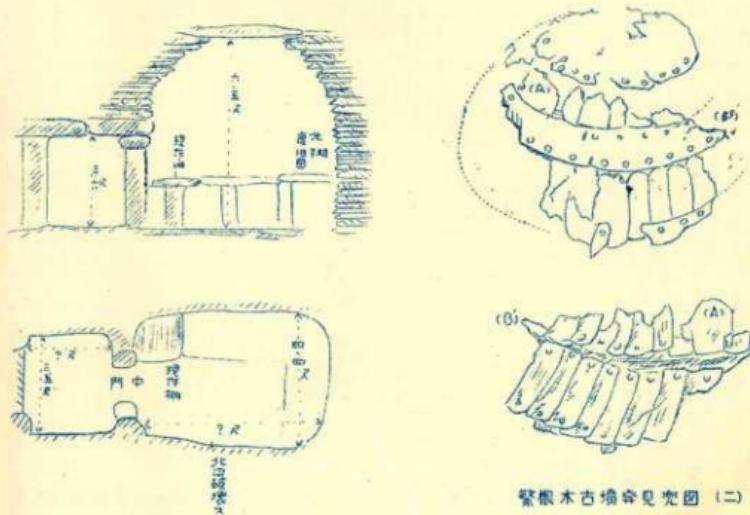
が扁平にな

る穿孔によ

あう。この
かある。す
ぐらり。ま
よより年代
雪午晴の推

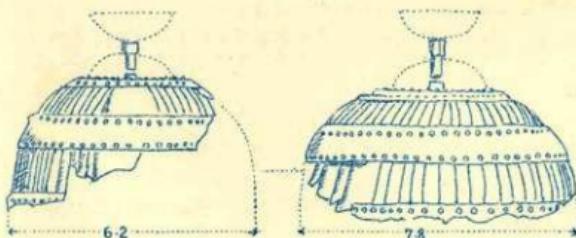
部分の何北
の場合陪葬
思うが、兩
本の位置の

通常封土の上部にある丘に対し、上部の石棺が後の塚墓であると断することは頗る困難で、かくて石棺を以て陪葬にかかる横造部分とすることに人々の意見は一致するであろう。果してそうだとすれば、本圖の示す状態は、主室の部分には簡単な棺で陪葬には壮麗な石室を有するものとしなくてはならない。たゞ既に述べた通りこの石室が封土の第一段に基底をおくことから推し、また境内に戴する武具類の上から考へて、兩者の間に多くの同時的距たりき予想しがたい。そのことは上代の陪葬を尚ざる上にもまた同時に相異なる二型式の存在を想定する上にも寄与するものとしてまさに吾人の關心に值すべきものである。



繁根木古墳券見穴図 (二)

繁根木古墳石室形状図



繁根木古墳券見穴図 (一)

高工芸品で
長さ2セ
ンチメート
ル先端丸
い金地の元
倍ずつつけ
くす玉型の公
せ。さらに
手の割に大き
たものである。

この出土物
のニュースス
リウ。本県の
玉名市玉名の
城に集中して

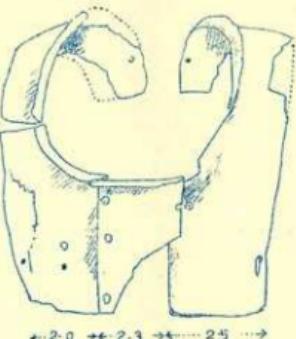
古墳時代中
が国に盛んにな
うになる。分
化はその尊卑
その流域に根
玉名、山内
の金銀、白銀
った。伝左
金製環、金
玉綱

この時代
ある。玉綱
から出土す
治次前の遺
伝在山古墳に
去り、管玉
0句王

堆土の
かり、先
げて半コ
その小孔
0管玉
管玉は
たもので
横から出
ここで

※ 伝左山古墳の発見から過去において行われた調査の經過については、本文一頁2
・墳形 以下明治三十年十月の福原盛郎氏
(当時京本師範学校教諭)の著になろ「玉
名郡繁根木古墳出古物参考書」及び下林繁
夫氏(当時東京文部省官吏、済々堂叢書)の実査を
主として作成された大正十四年刊行の「縣
本史跡名勝天然記念物設告二、蘇平県下
にて令起せられた古古墳の調査 玉名郡繁
根木の古墳」の項に基いて記述紹介したものである。

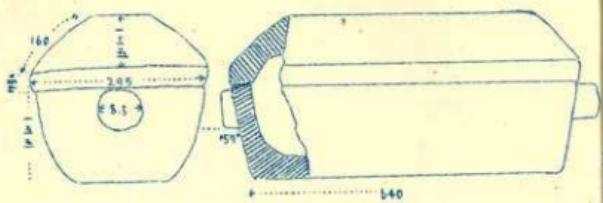
× × × × × × × × × × ×



繁根木古墳発見図

(3) 管三相弁見副葬品

玉名市では、
当古墳が全国
的に名ある重
要な文化財で
あるため、昭
和40年、古
墳敷地の北半部を
実査次いで南北も
國よりねじり下け直受け。
古墳敷地の全面玉名市有地



繁根木古墳上管部 石棺図

として確保し古墳の保護に万全を期した。これを機として玉名市教育委員会は荒廢していた古墳内外の清掃と実測調査を行つた。その際に耳飾り、首飾りなどの装身具をはじめとし、鐵鏡、刀劍や鎧甲などの鉄片、馬具片その他のものが多數発見された。因みに当古墳の副葬品の遺存については、前記の通り墨云二類に亘って発見され、各種遺物も徹底的に洗収されているためその後は皆無とされていただけに聖三相弁見足では関係者を極度に驚嘆させた。以下その出土品の細部について述べることとする。

△ 装身具類

イ 金製空節付耳飾り

伝左山古墳より出土した金製耳飾りが二種、二個ある。一つは墳外へ推出した土中よりガラス片、鏡器片、其の他の塵芥に混り砂にかかつて発見された空節付耳飾りとされるものと他は、内部の清掃中奥室床面の北壁に接する地点から発見された金製耳飾りである。

空節付耳飾りでは、母貝、補助環、根縫めの飾り玉、空孔飾りの四部からなる高度な細金組工と進歩的な熔接技術を駆使して造られた高級豪華な貴金属

高工芸品である。

長さ2センチ、頭部の脛り、アセンチの象頭型中空金地に頸部の幾次鉢合と中央に、2本の金糸をより合わせてつくった環帶を一重づつ入れ、次に小さくなつて成く先つた末端に螺旋状、三室に密着させてつくった空孔飾りと、径0.5センチの小さな金地の球形を、金のより糸を一巻いて上下界合に分け、同じ金糸で小円をちぎりつけてち糸の花形に表わし、各外の空隙に金の小粒をろう付けにして飾つたくず玉型の金具の中に左端に擴張した二角の金糸を彫り金具と補助環に連続させ、さらに上にわすかに開いてハート型とした長径1.5センチ、短径1.3センチの割に大きい島の母透につなぎ、母環の切札目で耳だけをはさんで飾るようになしたものである。

この出土例は全国的に数が少なく、専門的にこの種の研究を進めている人の最近のニュースでは玉名市内出土の大坊・伝左山の二例も加えて全国で3-2例があるといふ。本県内では当伝左山出土品を除けば、菊水町舟山古墳出土品(明治5年)と玉名市玉名の大坊古墳出土品(昭和38年)3点があるだけで、すべてが菊池川流域に集中していることに重要な歴史的意義があつてもうえなくてはならない。

古墳時代中、後期頃、大和朝廷の大葬進出に際して、進歩的な波の地の文化は我が國に盛んに吸収され、古墳墓葬や豪族の生活様式に大変の傾向が強く表われようになる。分けても彼の地に全盛を極めた奈良朝の百濟、佐耶、新羅等の高度の文化はその直接地北部九州に直接入ざり、次いで有明海より菊池川をルートとして、その流域に播送したものであると考せられる。

玉名、山鹿地方の古墳に彩色魚形文が採用され、副葬品に半島や大陸輸入の金銀、白銅製品が加えられるなど、彼の地のぞいきようは極めて幅広いものとなつた。伝左山古墳はこうした影響下に造営されたものの一つである。

金製環 径0.3センチ、長さ6.2センチの金線を円型にしたものである。

玉類

この時代の表模の身玉飾り、後底を表示するものとして金製玉飾と並んで玉類がある。玉類もこの時代に全盛期をつくり、また終末期ともなつていく。各地の古墳から出土するその種類もいろいろあり、數も限りがない。伝左山古墳出土では、明治以前の過去数回の盗難と、明治以後再度の盗掘で多くが失喪したものと思われ、伝左山古墳ほどの規模をもつ優れた古墳出土品にしては少多であつた。ここでは勾玉1、管玉1、内一つは断片、ガラスの金玉403個が出土している。

○勾玉

群玉の中から尋にかかつて弁見されたものである。碧玉で造られ全面磨きがかかり、光沢あり濃緑色を呈する。長さ1.7センチ、頭部を大きくし、後尾を狭く曲げて半コの字型につくり、円柱腹部の中央に横に小孔を設けた垂通型の勾玉で、その小孔にひもを通し他の玉類と組み合せ、首飾りとして用いられたものである。

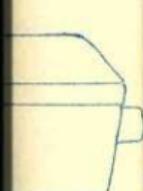
○管玉

管玉は、勾玉、小玉などとともに組み合わせ、主として首飾りとして用いられたものであるが、この時代になつてその使用は頻繁であつたため、この時期の古墳から出土するものは通例であろう。

ここでは二種類が出土した。一つは長さ2.7センチ、上下同じ大きさで、直



25 →
後醍醐天皇



安賀会は三密
りなどの装飾
が多款見
に亘って此地
に聚三類を是
ることとする。

外へ拵出した
見された重荷
がら見見され
引篠りの四部
被革等な資材

径り、7センチの円筒形で、前記勾玉と同質の碧玉製の廢き上げの同じ組み合せのものと見らる。

他の小面皿み帶びた石質が用いられて居るが、長さに多少の相違があり、長いほうで2.5センチ、最も短かくは2.2センチ、いずれも両端が小さく、中ほどはわずかにふくらみのある円筒形で直径約4センチの大きさになる。他の一つはその残次である。廢き上げの表面に深い風化が認められる。小玉やその他の玉類と組み合せ、首飾りとして身を飾つたものであろう。

○小玉

この時代の古墳出土で圧倒的に多數を占むるものは小玉類であろう。多くはガラスで造られ、粒の大きいものは大豆ぐらりの大きさで、藍色を呈し、中心に小穴を通し両端を平らにすり磨いたものが多い、小さいものは蒙粒の半分にも満たないものがあり、黄、白、うす緑、緑、群青など色素を加えた色どりがあり、总数403個が出土した。

B. 武具類

武具としてまとまつたものは鉄鎌だけで、他は甲冑、刀剣の残片であった。明治年間に見出された残片であろう。

鉄鎌は柄型を保つて居るものが多く、床面の南東部敷石の上や、東隣室と壁との隙間に多く置かれ、無刃の断片は墳内東面全周に散乱していた。また堆土中より散見された破片も数多く、過去において何回となくかき乱されたうなぎが裏厚である。

長さも形も大同小異あり、その数はおよそ30本分はあると推定される。1.6~7センチ位の長さの根元近くにまちの刻みのある長首の尖頭式で、尖頭の割に長いもの、片刃あり双刃あり、かえりのあるもの、ないものなどさまざまである。その起小字多数ありリットルの容積に相当する量を出した。

①. 馬具類

断片で見出された。唐の部分で、はみのつなぎ環、鏡板環の破片数片が堆土中より空見されている。残次で全体の形状を確認することは困難であるが、他の古墳（川路古墳、馬出古墳）の出土例から考へ、鏡に付着したつなぎ金具が認められる一跡であることがわかる。

6.まとめ

佐佐山古墳が安政年間に倉庫建設の土木工事为契机として偶然に発見されて以来世人の間にここに集中され、明治年間に至つて福澤甚郎氏、下林繁次氏等の調査によつて、内部構造や副葬品の状態が明らかにされたことは前に述べた通りであるが、二段構造による古墳の封土下室に、前室と奥室を設けた複石小口積み石室を窓き、上層の封土内に石棺を封じたという間に多く例を見ぬ珍らしい後式古墳であることが明らかにされ、葬木の古墳として全国に紹介された。その後当県では熊本県史跡名勝天然記念物報告書に記載して、大正十四年にこなされ以来さらに世の注目は深くなつた。その向井見当初確認された宝室石棺は後焼され一部を残

していたところが、現在ではその形跡も認められないのである。

戦前こころまで繁栄木八幡宮の表ギー一帯は人衆もまばらで、人里はなれ荒涼として人の足をひくようなところではなかつた。八幡宮境内より、箱荷堂前を北へ行き、無心に改つた苔塗の中を南へまわつて古墳の穴を見つけ出し、おそらくおそる中をのぞいたものであつた。別に何か走得ようとする目的があるわけでもなく、ただ見てみたいと思う好奇心からだけであつた。中は小さい石をきれいに積み重ねて丸いよう、四角いような部屋になり、一面まづかで、板のような石が折り重なり、かねてかずら草が一ぱいにはびこつて怪奇漂うありさまであつた。壁に古あわれた丘の上には石祠が一つあり、桜の古木が何本かあつた。山桜ではあつたが春の梅花期には見事で、ある新聞社の肥後桜名所選定の候補にあげられたこともあります。その傍は「伝左山の桜」として可なりに知られてゐた。桜のある丘の東もとにざまつな瓦ぶきだつたと思うお堂があり、古びた大きな木造の二体の觀音さまがまつてあつた。堂の前にもいくつかの石仏や石塔がならんでいて、何か由緒ありけんと思われてならない。その後になつてこれらお堂、觀音さま、石仏などのこらむ県有財産南東の一隅に移されているが、もとこの付近にあつた寺福寺の遺物らしい。

幼少のこち、まちに遊びに出たついでに伝左山を見にいつたことが今なお記憶に残つてゐる。

このこち伝左山古墳も人々の観心から遠のいて、かえりみざもなく放任されたままになつていたようで、戦前、戦後ごろの荒れようは一方ではなかつた。その後北側の道路拡張、国鉄208号線の開通など急速に進むと、付近に家々が立ちはじめ、今日では古墳周辺は空地もないまでに押し詰められ、付近に民家ができると、古墳石室は庭芥拾て場に利用され、生活障害が一ぱいに横つて奥氣樂を窓くほどになつてゐた。見ろに見かねた町青年団や市役所の奉仕で壇上の整備り、壇内の清掃が幾度か行われたりした。

近来になつて機械による大規模の土木事業が盛んになると、古墳を取り払つて新企画の事業を興そうとする動きがあつたが、見識ある市当局はいち早くこの問題を解消させた。個人所有になつてゐた古墳敷地の北半を買收し、次いで国有地の勘定部の払い下げを受け、敷地全面を市有地として確保し、古墳の保護に万全を期すこととなつた。

この意義を深く認識し、古墳に対する関心と敬度の心情を薫拂し、先人の遺した文化をもとにしてこれからの新しい文化創造に努力することが私たちに課せられた最大の責務であると思う。

※ 伝左山古墳出土品で第1期・第2期共見のもののうちで短矛1領、薙頭大刀2口、直刀片1枚、貝輪2個が日本大学教育学部記、熊本市立博物館に、第3期(昭和40年8月)共見品1枚文化厅質上り、東京国立博物館にそれぞれ保管されてゐる。

昭和46年2月 指定

熊本県玉名市 繁根木

伝左山古墳 関係写真

熊本県玉名市 教育委員会



1 伝左山古墳 墓丘南面

中央の穴は安政4年春見当時の破壊孔で
主宝天井の南端にあたるところ。

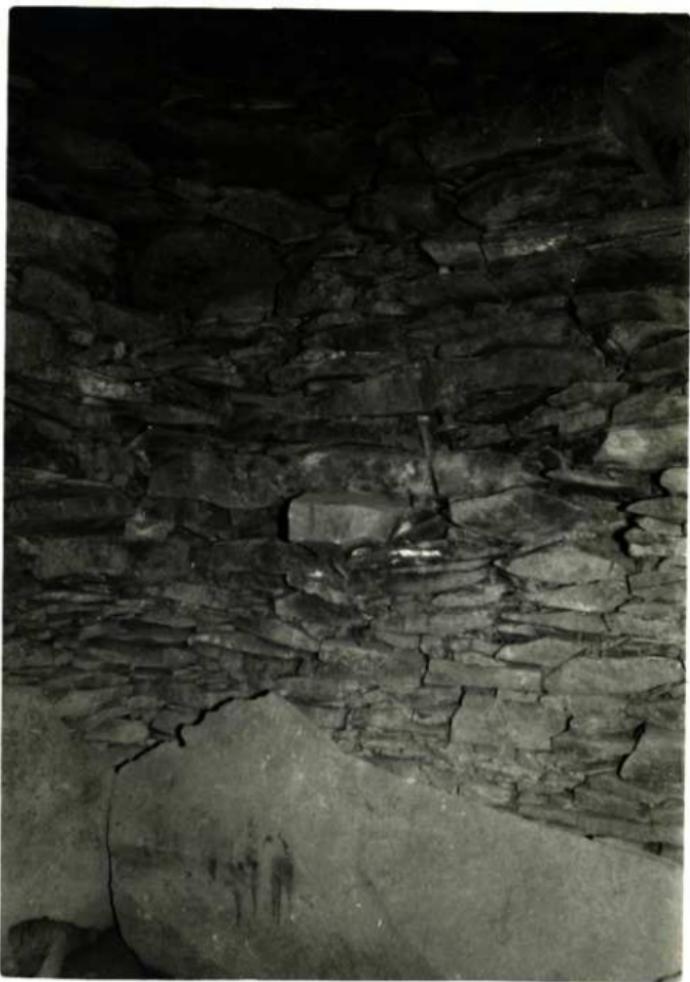
2. 北方より見た佐左山古墳々丘





十四 東北の小河原の次第

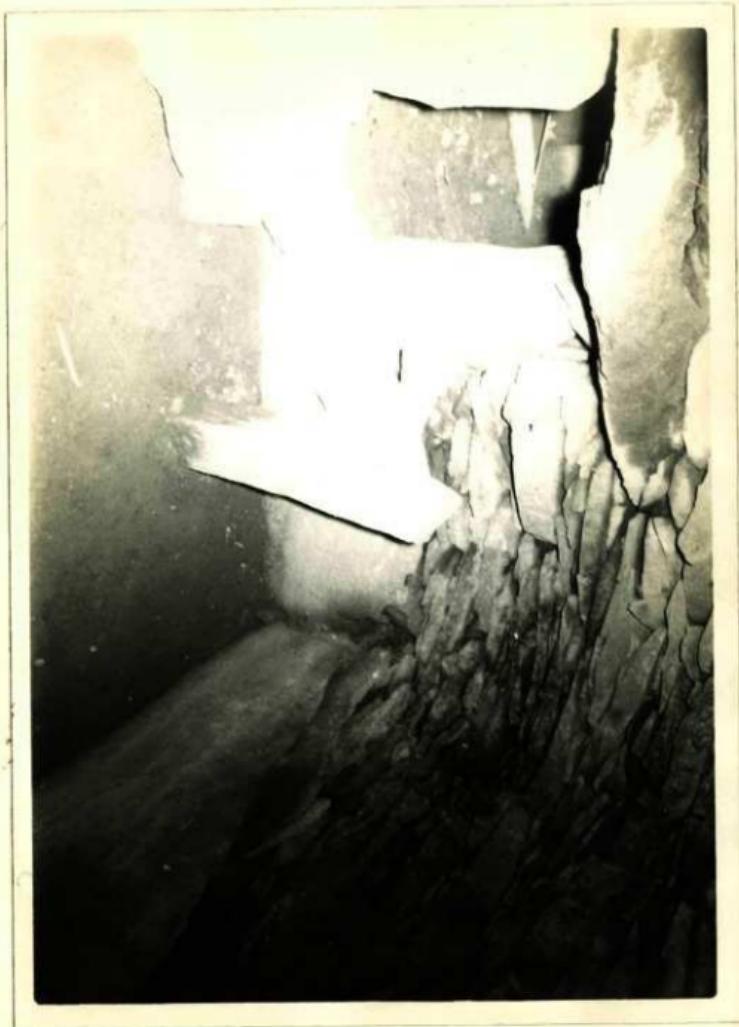




5. 玄室 東壁面小口積み及び凸起石(中央)を示す



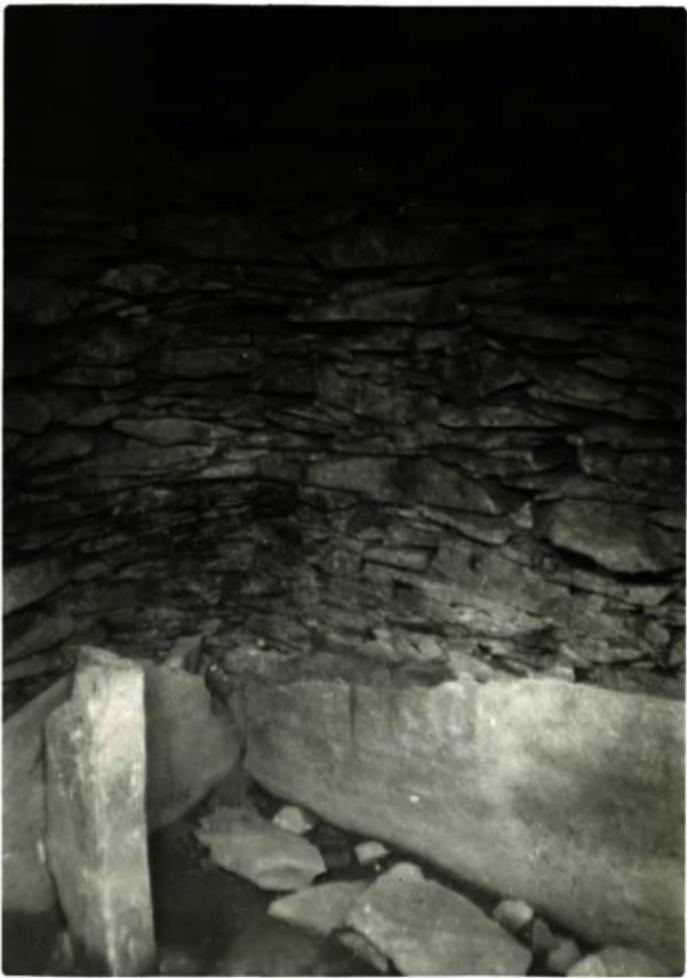
6. 玄室 北西隅小口積み及び床面石部の一部



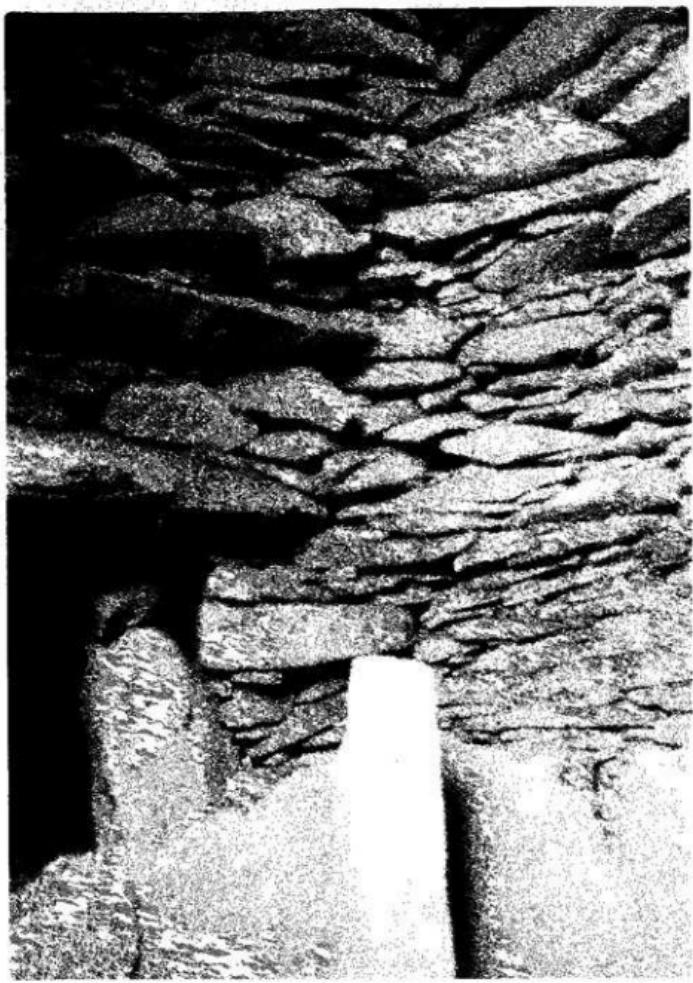
八、1959年6月25日于山西平遥



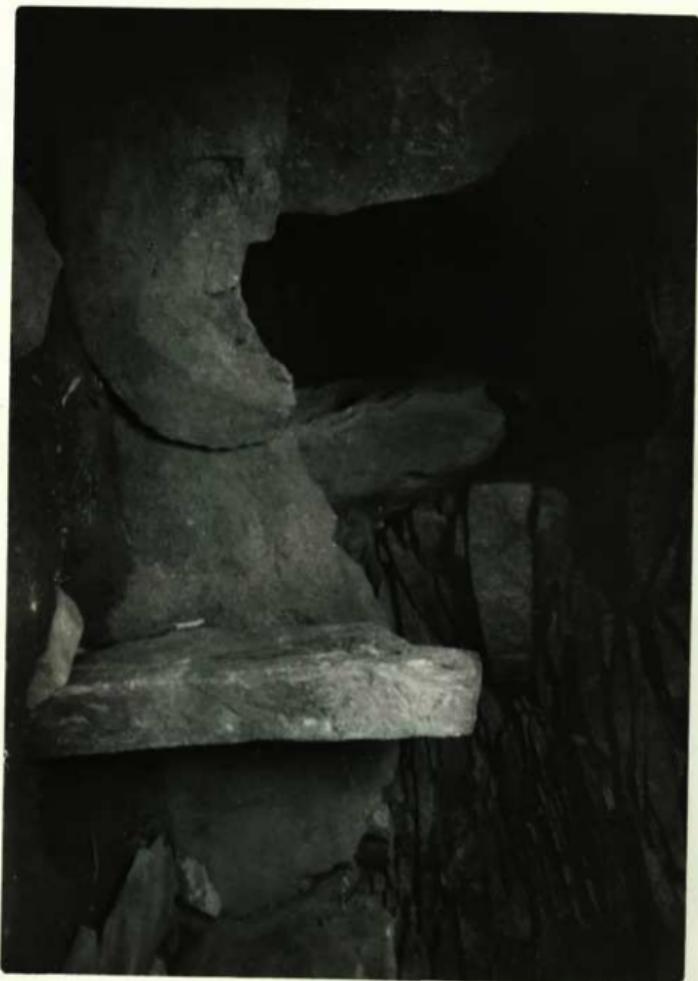
88 告別の時 時間と空間



9. 玄室 西北隅及び床面石葬の状態



10. 前同



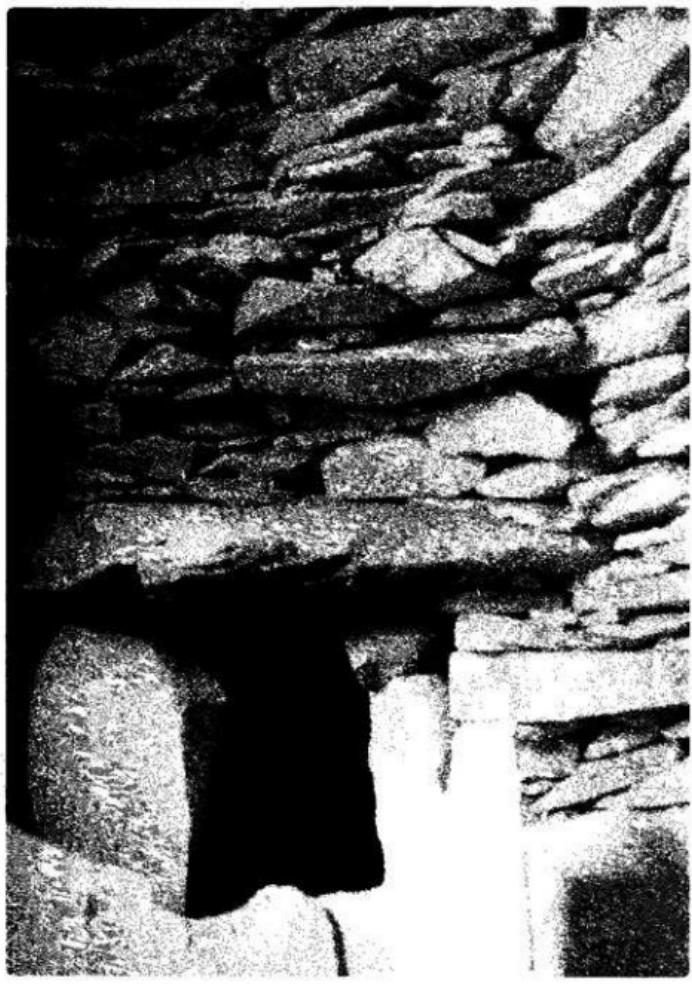
二
韓國美術全集



12. 玄室北西隅 石郭・小口積壁・天井の一部



13. 玄室より見た第2奥門部及び西壁面



14. 玄室第2義門及び上層壁面



15. 太室天井部石組



18. 垂飾り付耳飾り (拡大)



19

矢立甲

(熊本市立博物館蔵)



20 比 呼 雜 (水 茄) (水 茄)

